

＝飛躍を期す＝

第7回定期総会開催

ふらっと南幌会報

発行元

NPO
ふらっと南幌

南幌町栄町
4丁目4番19号
378-2203

さらなる活動の飛躍を目指す、NPO法人ふらっと南幌の第七回定期総会が六月二十八日、「ふるさと物産館ビュウロ」で開催された。二〇一四（平成二六）年度の事業・活動と決算報告を承認に続き二〇一五（平成二七）年度の事業・活動計画と予算案を原案通り決定した。予算規模は農水省助成の中止が影響して三百万円に縮小。反面、石狩川振興財団をはじめ南幌町、損保ジャパン日本興亜との事業が開始される。さらに、イオングループ主催で環境省らの後援「生物多様性日本アワード賞」に環境省推薦で申し込む。

私達ふらっと南幌のNPO法人としての活動は、当初はまちの歴史や景観を学ぶ取組みや文化イベントなどのまちづくり活動が中心でしたが、その後、地域の環境を活かしたフットパスへの取組みや地域の農家さんとの連携した活動へと広がって来ました。さらに、近年では、地域の発展と深く結びついた農地開発や安全・安心の定住の基礎となる治水事業等に伴って姿を変えていった、かつての「幌向原野」の植生の保全・再生・活用をめざした活動等にも取り組んでいます。このような活動分野の多様化に伴って、関連分野の専門家の方々のご指導・御協力とともに、その方達の継続的研究活動と連携しながら地域でそれを下支えする持続的取組みも必要となり、人材の育成・確保と活動財源の確保が課題となって来ました。また、活動のフィールドが河川環境と関わることから、北海道開発局・札幌開発建設部・江別・千歳両河川事務所等関係官公庁、南幌町等との連携が重要になって来ました。これまでの民間中心の自主活動から、今後は、国や道、各種の公的資金の導入や民間諸組織の寄付金・助成金等のご支援も受けながら、より充実した取組みとして行き、そのことを通じて、今まで以上に地域に貢献出来る活動として行きたいと考えています。

代表理事 濱田 暁生

会員数のさらなる確保を目指すとともに事務局体制の充実を進めながら「認定NPO法人」への可能性を探る。
事業・活動計画の内容は以下の通り。

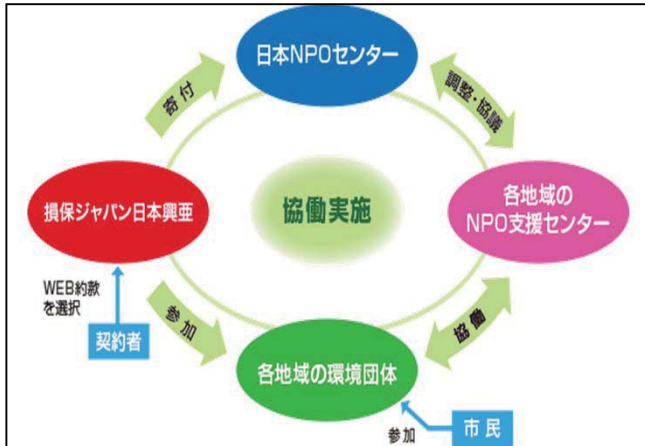
●フットパス事業

フットパス活動は、農業生産者と都市住民とをつなぐ重要な手段。広域フットパス「北海道開拓の道」縄文古道と松浦武四郎の観た世界 百キロ」を十月に開催。全コースを四泊五日で踏破する。（二頁に続く）



希少生物種の暮らす
自然環境の改善を
目指すプロジェクト。
全国の環境団体と

各地のNPO支援セ
ンター、日本NPOセン
ター、損保ジャパン日
本興亜の協働事業。



イオングループ主催



「ふらっと南幌」は環境省北海道
地方環境事務所の推薦を受け、第四
回生物多様性日本アワード賞に挑
戦しました。この賞の主催は公益財
団法人イオン環境財団。後援には環
境省、国連生物多様性の十年日本委
員会、共同通信社、朝日新聞社、毎
日新聞社、読売新聞社。(三頁へ)

受賞団体は全国で五件、 超難関へ初挑戦

●第二十一回全道フットパスの集い

i n なんぼろ

北海道ではじめての輪中コース(石狩川、千歳川、新夕張川、旧夕張川の河川堤防)の一部を使用して開催。将来、マラソンやクロスカントリーの公認コースを展望。

●その他の自主事業

「エコ田んぼ」の他に確定事業は以下。

☆損保ジャパン日本興亜SAVE JAPANプロジェクト↓函館大沼ラムサール

湿地地区のNPO法人と連携、南幌と大沼地区での「環境フットパス」開催

☆一般社団法人 石狩川振興財団との協働

↓河川堤防の「外来植物分布調査」

☆南幌町まちづくり支援事業↓新夕張川の湿地再生地と幌向湿原(町からの借地)を結ぶフットパスを開催。幌向湿原の笹刈りによる「埋もれた植生」の調査

●交流団体との連携

「フットパス・ネットワーク北海道」の行

事はもとより、当別高校生のフットパスや

「札幌植物の会」による「南幌防風林」観察と湿性植物の復元事業の観察会(九月上旬)が予定されている。

今後の活動も地元をはじめ町外・道外各地の南幌ファンや食の安心・安全に関心の高い方々とともに活発な活動を展開、懸案である「地域の環境保全」(ほろむい七草とオオミズゴケの活用・生産)の産業化実現を目指す。なお、役員人事はなし。

プロジェクト名～「ほろむい七草」と オオミスゴケの再生・保全・活用



二〇一〇年に生物多様性条約第十回締約国会議（COP10名古屋）を機に前年、国内賞を創設、以来二年に一度、奇数年に実施。日本在住の団体・個人による。生物多

様性の保全と継続可能な利用に資する優れた取り組みを選出・顕彰。グランプリ一件優秀賞四件。九月に発表、十月に東京で授賞式が開催される。

延べ百八十名が参加した「全道
フットパスの集い」は、北海道百選の
ろく初日、「北海道百選の
道」は、幌向運河沿いを歩く（ス
タッフ除き八十九名が長官橋で
コカフコーラの「いろはす」を
給水）



「全道フットパスの集い」
三度目の開催

トパス

イルと地域づくり

聴衆九十一名

地域資源と絡めるフットパス＝一筋の光を見た

「以下、記念講演の要旨」

いま、全国的に少子化と高齢化の波は速度を速めている。止めようがない状態だ。地方の町は「消滅の危機」と日本創生会議も指摘する。三十年後、北海道の人口は二四%減の四一九万人との推定。「人口ポーンナス時代」から「人口オーナス時代」へ移行するのだから、ライフスタイルの転換と地域づくりが重要になる。フツ

北海道は「ライフスタイルビジネス」の宝庫

石森秀三氏

北海道博物館館長



プロフィール

1945年に神戸市で生まれる。甲南大学経済学部を卒業し、ニュージーランド・オークランド大大学院に留学後、「博物館革命」を引き起こした梅棹忠夫氏に師事。国立民族学博物館(大阪)で、博物館民族学研究部長を歴任。2006年より「北海道大学観光学高等研究センター」初代センター長。10代目北海道開拓記念館長に就任。北海道博物館設立に伴い、現職。

三度目の南幌開催となる「第二十一回全道フットパスの集い」が七月四、五日に開かれた。初日午後、幌向運河コース約六キロを歩く。南幌温泉到着後、大型バスで農業改善センターへ。記念講演と鼎談(シンポジウム)、その後の交流会を行った。講演会に先立ち、馬頭琴&喉歌&ケーナ演奏。モンゴルやボリビア民謡に聞き入った。交流会の余興の「南幌俵つみ歌」は好評を博した。翌日は北海道唯一の輪中コースを使用し「新夕張川ルート(十二キロ)」と「千歳川ルート(六キロ)」に分かれて歩いた。

ニュー・ノーマルとしてのフットパス

人口減少時代のライフスタ

力説のあまり、少々興奮する石森氏



トパス運動は「観光」が展望可能で一筋の光が見えた。アベノミックスを代表する「オールドノーマル」(マネー資本主義)から脱却して、「ニューノーマル」(脱マネー資本主義)に進みたい。〇七年に「二〇五〇日本低炭素社会」(国立環境研究所ほか)では二つのシナリオを発表。「アーバンライフ」(都会暮らし)と「グリーンライフ」(田舎暮らし)。近年、後者が増加傾向だ。「北海道体験移住」実績トップは釧路市、〇五年に設立した「移住促進協議会」に参加する自治体も一一、「体験事業」実施自治体は七六だ。北海道の食糧自給率は二〇〇%、日本で唯一、独立可能だが、国は北海道を捨てた感がある(小泉政権から)。地理的に似ている「スコットランド」は独立意識が強い、見習うべきだ。「観光資源」で見ると、アジアの中で抜群の優位性を持っている。「独り勝ち」も夢ではない。二十世紀は「他律的観光の時代」、二十一世紀は「自律的観光の時代」に変化。「五感・交流など」を重視、「食・健康・美容・医療・アート」とのコラボを思考する傾向。貪欲にフットパスビジネスの探求を!

(笑)多き「鼎談」

人材育成と発想の転換が「ジャンプ」の鍵

石森氏の記念講演に続いて、同氏を含む三氏による「鼎談」を開催、進行役は「巖さん」こと小川 巖氏が務めた。時折「寄せ」の雰囲気でも「笑い」を誘う一幕も。自己紹介も含めて「フットパスと観光」という視点

で、それぞれ持論を展開した。「地方創生」を本物にするには民間と官公庁の連携が不可欠。欧米では「観光」を柱に据え、工業、商業を支えている。産業化は「人材育成と発想の転換で飛躍を」と提言した。

濱田 暁生氏



神谷 由紀子氏



小川 巖氏



ふらっと南幌代表理事

満州国撫順市に生まれる。北海道大学卒。東海大学札幌校舎工学部建築学科講師、1970年建設設計事務所(株)アトリエング設立。同社代表役企画調査部長を経て、98年(株)シー・アイ・エス計画研究所設立。同社代表取締役社長。2004年より同社会長。フットパス・ネットワーク北海道の幹事兼務。

日本フットパス協会理事

上智大学卒。1992年居住する町田市北部に残る多磨丘陵を保全するフットパス活動を開始。1997年「鶴川地域まちづくり市民の会」を結成、代表。町田市のまちづくりに参画。2002年NPO法人「みどりのゆび」として東京都より認証。現在、理事兼事務局長。全国のフットパス先進自治体と共に「日本フットパス協会」設立に関与。以後、協会理事。

エコ・ネットワーク代表

松前町生まれ。環境学者・生態学者・動物学者で、専門は動物生態学、環境動物学、野生生物学。農学博士。信州大農学部を卒業後、北海道大学大学院農学研究科へ。道庁生活環境部技師として入庁。1984年道庁を退職、野生生物情報センターを設立、代表委員。1992年4月よりエコ・ネットワークを主宰。
★コーディネーター役



濱田氏「五感を

通して一緒に楽しむ心がけた。参加者が応援団になつてくれる。近年、若者の参加も。前向きな活動が良い結果に。役場も協力的に。

石森氏「フットパスの観光商品化はされていないが、プログラム化して価値を上げ、地域主導で情報発信を。今後、民間の連携は不可欠。神谷氏「地域創生」へのアプローチは難しいが、人材育成など地道な活動から「地域の生き残り」を。今回、心象風景(南幌)が出来た。

「コンドルは飛んでゆく」を合奏。嵯峨さんと岡田さん



多数の若者も参加した南幌俵つみ歌



「全道フットパス」の軌跡

- 第1回 札幌市
- 第2回 白老町
- 第3回 根室市
- 第4回 黒松内町
- 第5回 新得町
- 第6回 南幌町
- 第7回 二セコ町
- 第8回 根室市
- 第9回 えりも町
- 第10回 札幌市
- 第11回 南幌町
- 第12回 上富良野町
- 第13回 黒松内町
- 第14回 平取町
- 第15回 札幌市
- 第16回 音更町、浦幌町
- 第17回 旭川市、浦幌町、豊頃町
- 第18回 上富良野町
- 第19回 羽幌・天売 ※中止
- 第20回 西興部村



「全道フットパスの集い」二日目「ぐる」と南幌「輪中」の一部を使うフットパス。リバーサイド公園から江別河川防災センターの新夕張川ルートと南幌温泉から同センターの千歳川ルートの分かれて歩く。千歳川ルートでは「江別遊水地」の現場の中を通過、江別河川事務所からのガイド、「機材の移動」や「散水」の協力。また、新夕張川ルートでは工事業者五社の計らいで水洗トイレを設置。参加者の中にはゴミを拾う人も。

「輪中」河川堤防を歩く
新夕張川ルート（四〇名）
千歳川ルート（三三名）



美味しくな～れ！
**オーナー制度
 三年目の挑戦**



①5月30日、ユメピリカの田植え。子供を含め11名が参加。②7月11日、延べ10名で草取り。同時に田んぼの生き物調査。講師は「ふゆみずたんぼプロジェクトの橋部佳紀さん。[今後の予定]9月上旬に稲刈り、はさがけ。10月上旬、シーブツアーズとのタイアップして「収穫祭」



「第二一回全道フットパスの集い」
みなさまのお陰で大成功

参加団体（敬称略）

- ★イザベラ・バードの道を辿る会
- ★えにわフットパス愛好会
- ★江部乙丘陵ファンクラブ
- ★上富良野フットパス愛好会
- ★黒松内町フットパスボランティア
- ★さっぽろフットパスクラブ
- ★サロベツ フットパス利活用プロジェクトチーム
- ★様似町観光協会
- ★西興部フットパスを楽しむ会
- ★東十勝ロングトレイル協議会
- ★エコ・ネットワーク
- 北海道新聞野生動物基金
- 株式会社アーチ
- 株式会社エコテック
- 株式会社TAISHI
- 岩田地崎建設(株)
- 環境パートナーシップオフィス北海道
- ▲北海道立当別高校
- ▲札幌学院大学
- ▲北海道科学大学
- ※上川地方振興局
- ※様似町観光協会
- ※札幌開発建設部
江別河川事務所
- ※北海道総合政策部
- ※北海道農政部
- ※北海道開発技術センター
- ※南幌町